

楽しみながら徳のレンガを積む！

●尾谷さんの活動に見る徳のレンガを積む生き方！

今朝、尾谷英一さんから（株）ニューオタニ社長、春日部カヌー協会会長、経営革新塾しよう会会員）から次のようなメールが届いていました。

◆古利根川清掃 [尾谷英一さん、5/15、6:55]

おはようございます、古利根川に水がいっぱいになりました。4月初旬より金曜日は生産調整で休業をして川の清掃を行なっています。雇用調整助成金を利用してもらっています。カヌーの練習もしています。



◇ ◇

写真を拝見すると1回の清掃でかなりのゴミ袋が並んでいますね。ありがたいことです。コロナ禍での生産調整のために休業するだけでなく、川の清掃という社会貢献に時間を充てるって素晴らしいことです。

尾谷さんの会社では、写真の皆さんと20年近くにわたってソフトボールや卓球バレーを行い、社員全員で仕事とスポーツを楽しんでこられました。カヌーもその延長線上にあるのでしょうか、練習に合わせて川の清掃も行うって素晴らしいですね。

先日、WEB chichi に「徳のレンガを積む」という言葉がありました。尾谷さんの行動はまさに…。

◇ ◇

■陶芸家・北川八郎が説く、運を高め「徳のレンガを積む」生き方 [WEB chichi、5月10日]

かつて2度にわたる40日以上の断食をやり遂げ、宇宙の叡智に触れたという陶芸家の北川八郎さん。防衛大学校を中退後、サラリーマンとなるも人生の真理を求めて退社、インドを放浪するなどして辿り着いた熊本県阿蘇郡で窯を持ったその半生はまさに波乱万丈です。壮絶な精神遍歴の末に「人生繁栄の法則」を掴まれた北川さんに、多くの先賢が口を揃える「徳」の大事さ、その積み重ね方について伺いました。



◆徳のレンガを積む人生が大切

九州・阿蘇山中に工房を構え、陶芸に勤しむ私のもとに、不思議な縁で全国のいろいろなところから講演の依頼があります。私はその話の中でよく、「徳のレンガを積む人生が大切」という話をします。小さいことでも良きことを積み重ねておくことで、その人の人生も周囲も豊かに、笑顔の多いものになっていくと知っているからです。▼では、徳とは何でしょうか。現代人に分かりやすいように、私は、「人を救う勇気を持つこと」「人に悲しみや苦悩から脱出する勇気を与えることができること」と説明しています。またさらに、徳の人とは、不満と怒りを人生から取り除いた人と言えましょう。その現れ方は職種や役職によって様々です。例えば、経営者にとっての徳は、社員の生活と安らぎを保障し、能力を引き出し、いまの仕事が人々の幸せに役立っている喜びを感じさせることにあります。[中略]。

◆サラリーマンに知ってほしい徳の話

会社員などサラリーマンにとって徳とは何でしょうか。その話に入る前に、最近私がふと感じたことを述べてみたいと思います。▼昨年、若い経営者ら7人と一緒にアメリカを旅しました。日本を発つ前、私は3つのことを自分に課しました。一つは不安を口にしない、二つには誰かが道に迷ったり失敗しても責めない、三つにはこの旅の苦も楽も楽しもう、風雨や車の故障やいろいろなことがあっても全部楽しんでしまおう、ということでした。そして、結果的にとても楽しい旅行になったのです。▼実はこの3つはサラリーマン、特に経営幹部たちの大切な心得ではないかと思っています。業績が落ちそうな時、「これからどうなるんだろう」と不安や怯えばかりを口にする経営者や上司に部下はついていこうとは思いません。「おまえのせいであんなことになった」と自分のことは棚に上げて部下を咎めてばかりの上司もまた徳があるとはいえません。そういう人たちはばかりの集団では、仕事が順調に回るはずがないのです。▼私は人間の徳の大本にあるのは、「人を許す心」、「稀なるほど寛容な心」ではないかと思っています。しかし、そういう稀なるほど寛容な心は一朝一夕に培われるものではありません。何度も失敗し、苦しみ、反省を繰り返した後、あるいは病気やトラブルや中傷など諸々の試練を経た後、他人の痛みが心から分かるようになってこそ得られるのではないのでしょうか。釈尊のこういう詩があります。「光に生まれて 闇に沈む者／光に生まれて 光に入る者／闇に生まれて 闇に沈む者／闇に生まれて 光に入る者」私はこの中で「闇に生まれて 光に入る者」という一節に心惹かれます。様々な挫折を通してカネや地位や名誉で自分を汚す愚かさを知り、人に喜びと優しさを与える充実感を知ることになった人こそが本当に目覚めた人であり、徳のある人といえるのです。（本記事は月刊『致知』2010年5月号 特集「精進の中に楽あり」より抜粋・編集）